アメリカ研究の一資料

西川正身

Frederick Lewis Allen: Only Yesterday. An Informal History of the 1920's in America. 1931.

福田　實譯『米國現代史』（昭和十五年四月、改造社）

日支事變の進展に伴ひ、アメリカは、イギリスに引き續いて、

次第に吾々の關心を惹くところとなつた。しかも、それは、單なる關心に久しく止まつてはゐず、やがて、アメリカの敵性が問題視されるに至つた。殊に、對日通商條約廢棄の通告は、異常なショックを吾々に與へ、事の意外に、吾々は、抑へがたい憤りを覺えた。しかし、異常なショックを受けたその間の事情を靜かに考へてみる時、吾々として反省すべき點が、果してなかつたと言へるであらうか。思へば、アメリカは、吾々とはこの上もない密接な關係を持つた大國である。政治上、經濟上は、今改めて言ふまでもない。映畫、音樂、風俗その他、吾々の日常生活には、アメリカ的要素が、至る處に見受けられるのである。それにも拘らず、吾々は、これまで、まともなアメリカ研究を疎かにしてきた。アメリカ社會學を研究する者はあつても、その多くは、獨・佛語が不得手であるために、止むなくアメリカを專攻するか、あるひは、二流どこの頭腦の持主がアメリカを問題にしたと、先頃、某氏は、吾々の不勉强を嘆いたが、これは何も、社會學に限つた話ではない。文學の方面にしても、一部の特志家を除いて、ベスト・セラーの飜譯以上に出ることがなく、歷史的な研究は、これを顧みない有樣であつた。通商條約の廢棄は、吾々のこの不勉强の虛をつくものであつたと言つても誤りであるまい。相手國の非を責めるのはよい。だが、同時に、相手國を愼重に研究し、理解する態度は、いつの場合にあつても必要であらう。最近、吾が國にアメリカ研究熱が高まつてきたのは、その意味で誠に喜ばしい現象である。その來ること遲きを咎めるのはやさしい。吾々は、それぞれの持場から、このアメリカ研究熱を正しく導くやうに力を盡すのが至當であらう。ここにアレンの著書を取り上げるのも、やはりこの意味合ひからである。彼のこの著書は、既に十年も昔の出版ではあるが、大戰後十年間のアメリカ人の生活を知る上に有益であるばかりでない、廣く言つて、アメリカニズムをうかがふ上にも得がたい參考文獻であると考へられるのである。

アレンの著書は、副題にことはつてあるやうに、「非公式なアメリカ二十年代史」であるが、そこに描き出されてゐるのは、世界大戰が終はつて半年目の一九一九年五月の流行（ファッション）から、一九二九年十月の取引所大恐慌に至る、戰後十年間のアメリカ人の生活史、風俗史である。この十年間に、アメリカ人は、どのやうな生活を送つたか、アレンに從つて、一應、その後を辿つてみよう。平和克復の當日、カイゼルの人形を街頭で火炙りにした群衆の昂奮が收まり、平和の使者としてフランスにあつたウィルソン大統領が歸國の途に就いた頃には、アメリカの空氣は一變してゐた。戰時下の團結も、今は既にその必要がなくなつ

て、分裂の色が濃くなり、現實主義が理想主義に取つて代らうとしてゐた。ために、ウィルソンが空に描いた美しい虹の夢は、はかなくも破れ去り、代つてハーディングが大統領の地位について、アメリカは「常態」(normalcy) に復歸して行つた。アメリカ國民が、ウィルソンの唱へる國際聯盟の說に耳を傾けようとしなかつたのは、一つには、赤の脅威に心を奪はれてゐたからであつた。當時、人々は、赤色革命が明日にも起るものと信じ、戰々兢々としてゐた。その中に、恐怖は敵意に變つた。極端な彈壓が始まつた。過激分子はもとより、かりにも赤の疑ひのある者は悉く迫害を蒙つた。罪もないのに、側杖を喰つて暴民に殺された者もあつた。クー・クラックス團は、かうした雰圍氣のもとに勢力を得た。やがて、自分たちの恐怖が根も葉もないことが分り、赤の脅威が消え失せてみると、アメリカ國民は、憑かれてゐた者が俄かに吾に返つたやうに、日常の生活を樂しまねばならないと感じた。折よく、ラヂオが實用化した。スポーツが彼等を惹きつけた。麻雀が流行し始めた。若き世代は、道德の自由を叫び、その自由は、忽ち放縱と同意語になつた。女性のスカートは眼に見えて短くなり、斷髮、口紅が珍らしくなくなつた。フロイドの精神分析を自己流に解釋して、性道德を亂した。政界では、ハーディングの死をめぐつて、彼の醜聞が話題に上つた。クーリッヂが大統領となると、いはゆるクーリッヂ景氣が訪れた。自動車製造業者の時代である。一九一九年には、六百七十七萬一千臺の乘用車が使用されてゐたのが、二九年には、二千三百十二萬一千臺となつた。好景氣、推して知るべしである。新聞紙は、無軌道振りを發揮し始めた。故らにセンセーショナルな事件を探訪しては、讀者にスリルを味はせた。讀者の方でも、飽かずスリルを求めた。コリンズといふ名もない男が、洞穴の中で岩に足をはさまれて動けなくなつた。新聞はこの事件を大々的に報道した。コリンズの運命は、全國民の關心の的となつた。洞穴の周圍には、いつしか百餘のテントが張りめぐらされ、物見高い見物人に備へて軍隊までも出動した。それでゐて、この事件があつて暫らくの後、炭坑に棒事が起つて五十餘名の死者を出した時には、平凡な事件として一向に人々の注意を惹かないでしまつた。たしかにこれは、健全な心理ではない。このアメリカ國民の心理に、良い意味での轉換を與へたのが、かのリンドバーグの大西洋横斷飛行であつた。國民は、彼によつて、騎士道精神の尊さを再び知り、自嘲の泥沼から脫け出すことができた。だが、二十年代は、これで終はるのではなかつた。アルコールの問題がある。禁酒法案を、戰時の禁慾的な熱情のまだ冷めきらない中に通過させたの

はよいが、その後が大變であつた。禁酒法案は、俄然、二十年代の最もやかましい社會問題となつた。密輸が盛んに行はれる。アル・カポネの出現、そして、アメリカ名物のギャングの横行を見るやうにまでなる。また、一九二五年には、フロリダ景氣が絶頂にあつた。氣の狂つたやうに、土地の取引が行はれた。濕地でも、砂洲でも、何でも彼でも羽の飛ぶやうに賣れた。二十五ドルで買つておいた土地が、十五萬ドルで賣れた時代である。ところが、翌年九月、突如として襲うた暴風は、フロリダ景氣を無殘にも吹き飛ばしてしまつた。最後に、「フーヴァーの高相場」を經て恐慌來、株式は慘落に慘落を重ね、遂には一九二九年十月二十九日の大暴落となつて、「永久の繁榮」もはかない夢に過ぎず、アメリカの資本主義も、決して無敵のものではなく、やはり世界經濟と共に苦しむことを明かにした。新聞紙は、日毎に自殺者を報じた。かうして、アメリカは、三一—二年の底知れぬ不景氣指して、一途、下降線を辿るのであつた。

アレンの描いたアメリカ現代史では、風俗が重要な意味を持つてゐる。彼は、折ある毎に、風俗に言及して、その說くところを裏書きしてゐる。若い女性が道德的に自由になつたことを語る個所で、スカートの長短を云々するのがそれである。かつては、地面から六吋のところまであつたスカートが、その頃には膝まで來たといふ。斷髮が殖え、口紅の使用が增したことを、女性の道德觀に結びつける。（序でながら、婦人が家庭の雜務を免れやうとする傾向の現はれとして、罐詰類の賣行が增大したこと、洗濯屋の利用が、一九一四年から二四年までの間に、五十七パーセントの增加を示したこと等を引き合ひに出して、巧みに統計を利用してゐるのは、アレンの方法の注意すべき特色であらう。）また、アレンは、一つの事件を描いても、事件そのもののために描くのではなく、常に何等かのシンボルとして取り扱つてゐる。例へば、彼は、リンドバーグを飛行家としてはさまで高く買はず、むしろ、國民の渴望を充たす一つのシンボルとして評價するのである。その頃、アメリカ國民は、安價な英雄主義やスキャンダルに食傷し、自ら求めたこととは言ひながら、それまで人間性を卑しいものに見做してきたことに反逆し始めてゐた。言はば、精神的に飢ゑてゐたのである。そこへ無名のリンドバーグが現はれて、あの大飛行を美事にやつてのけた。國民は、彼によつて、一度失つたロマンス・騎士道・自己犧牲を取り戻した思ひがした。リンドバーグを偶像視したのも、むりからぬことであつた。かやうに、アレンは、リンドバーグをシンボルとして用ひてゐる。この場合だけではない、大

小樣々の事件がシンボルの役目を果してゐる。これまた、アレンの方法の特色として、記憶すべき點であらう。更にまた、アレンのスタイルは、アメリカ二十年代史を描く上に頗る效果的である。讀む人が知らず知らず昂奮の渦卷の中に引きこまれて行くのは、目まぐるしい事件の移り行きを、ジャーナリズムで磨いた彼獨特のスタイルで描いて居ればこそである。現に、イギリスに、アレンを眞似て同時代を取り扱つた Just the Other Day といふ書物があるが、同じやうな事件を描きながら、讀者に與へる效果は、アレンとは比較にならぬほど平凡である。その點、アレン自身も、その著書も、あくまでアメリカ的であると言つて過言ではない。

アレンのこの著書を讀む者は、誰しも熱にうかされた者の物狂はしさを受けとることであらう。たしかに、アメリカの二十年代は何物かに憑かれてゐる感じである。だが、ただの物狂はしさであれば、何もわざわざアメリカの戰後を持ち出すには當らない。手近い、吾々の周圍を見ても、その例はいくらも見當るのである。デパートの賣場、東京驛の列車發着所、あるひは震災直後の吾々を考へてみれば十分であらう。群衆心理は、東西でさほど變るとは思へないからである。しかし、アメリカ二十年代の物狂はしさは、單なる物狂はしさではない。その底には、他に見られない何物かがあるやうだ。それは、外でもない旺盛な生活力である。彼等が、目まぐるしいばかりに、事件から事件を追ひかけるのは、彼等の恐るべき精力のさせる業なのだ。彼等とて、大戰後、幻滅を覺えはしたであらう。だが、同じ幻滅でも、イギリスの二十年代に見られる暗さ、いらだたしさがどこに見出されるであらう。アメリカの幻滅は、根深いものではなかつた。彼等の生活力の前には、幻滅など、あつてもないに等しかつた。「アメリカン・マーキュリ」誌に據つて、毒舌を恣にしたメンケンを例にとつて考へてみるとよい。彼がアメリカ社會のあらゆる面を痛罵する態度は、どこまでも樂天的で、現世的ではないか。懷疑心とは凡そ緣の遠い健康そのものといふ感じを受けとる。これがアメリカの若さである。また、アメリカの作家は、現實に壓倒されて、作品を整へる暇がないとしばしば言はれる。アメリカの現實は、それほどまでに强力であるのだ。ここに思ひ到ると、吾が國の若い人々が、映畫などを通して、アメリカを模倣する危險が思ひやられてならない。兩國の現實の相違を十分に辨へず盲目的にアメリカニズムに追隨する時、どのやうな寒心すべき結果を將來するか、今更ことはるまでもないであらう。アメリカに對する吾々の態度にしてもさうである。アメリカニズムがその基礎をおく生活力を、豫

め計算に入れてかからねばなるまい。アレンの著書も、この心構へで讀んだならば、また別種の味はひを持つてくることであらう。勿論、アレンを讀んで、却つてないものを欲する氣持は起る。赤の脅威の犧牲となつて斃れた無辜の民や、恐慌で何百萬となく街頭に放り出された失業者の運命について考へさせられもしよう。しかし、それは、今言つたやうに、ないものを望むことである。アレンは、アレンとして讀むのが正しい。それはともかく、現代史の一つの方法、アメリカ二十年代史、アメリカ輿論の動ぎ等々を知る良書として、大方の讀者に一讀をお勤めしたいと思ふ。

このアレンの飜譯が、このほど、福田實氏の手によつて上梓された。頗る時宜を得た企てとして、本書の譯出を、讀者と共に喜びたい。ところで、飜譯の出來映えはと言ふと、それが甚だ芳しくないのでがつかりもし、腹立たしくも思はれた。實は、アレンの原著が面白いので、飜譯が出たのを幸ひ、アレンの紹介かたがた、福田氏の譯を推薦しようと思つて筆をとつたのであるが、あまりにもお粗末な譯であるので、吾ながら、ひつこみがつかなくなつて弱つた。これほど杜撰な譯には、ここ暫らく、お目にかかつたことがないのである。もとより、誤植のない書物が稀であるやうに、誤譯のない飜譯は、先づないと言つてよいのであるから、些細な誤りをとやかく言ふつもりは更にないのである。筆者など、發表してしまつた後で、赤恥をかいたことが、自慢ではないが、一度や二度ではない。だが、福田氏の譯は、何としてもひどい。シュプラッハゲフュールを傳へるの、スタイルを移すのどころの騒ぎではない。英語の初歩が、一體、分つてゐるのかと言ひたい位であるから、全く問題にも何もならない。時間と根氣とがあつたら、一頁に一ヶ所づつ、誤譯を拾ひ出すことは、易々たることであらう。譯書二百六十一頁から次頁へかけて、僅か二頁たらずのところに、十五六の誤りを見出した。具體的に、一つだけ例を擧げよう。三十二頁に、「彼が歸國してアメリカ國民に語つた會議の物語は、善人達と私利私慾を離れた人類の福祉の爲の眞の勞働として、非常に美しいロマンスであつた」(傍點筆者)といふ譯の分らぬ文章がある。原文を見ると、何のことはない、"a very beautiful romance of good men and true labouring without thought of selfish advantage for the welfare of humanity" とあるのだ。文中の "good men and true" が、シェイクスピアに出てゐることは知らなくともよいとして、時には「陪審員」を意味することもある、まとまつた慣用語句であること位は知つて

ゐて恥にはなるまい。尙、ここの "good" が、「善い」といふ意味であるかどうか、念のため、辭書に當る必要があらう。今、ジェイクスピアを出したので序でに言ふが、原著には、聖書からの引用句、慣用語句が中々に多い。福田氏は、それに氣が付かず、意味をなさない譯をしてゐる個所がいくつか見當つた。近頃、飜譯物を批評する場合、字句の解釋を云々することが罪惡でもあるかのやうに思はれてゐるせゐか、非力な者まで、原文を全體としてとか何とか言つて、細部に拘泥しないのを特權のやうに考へてゐるのではないかと思はれる節があるが、重箱の隅を楊枝でほじくる如きあら探しは許しがたいとしても、ひどい飜譯書は、思ひきりたたいて然るべきであらう。それから福田氏は、アメリカの二十年代を大して御存じないらしい。「ワールドの野球シリーズ World's Series baseball」(二百二十三頁)では、野球の知識の缺如を暴露し、「ワトソン」(二百十四頁)に註を附したのは結構であるが、「D. M. Watson (一八八六—) 英の動物學者」としたのは、戰後の心理學について一通りの知識もないことを自ら白狀するやうなものである。このワトソンは、言ふまでもなく、Behaviorism で有名なアメリカの心理學者、John B. Watson (一八七八—)のことである。細かいことをうるさく言ふやうであるが、アレンを譯出する以上、アメリカの二十年代について、前以て調べておく位の良心が望ましいからである。この外、むづかしい個所を省略する、讀み落し、讀み違ひをやる、固有名詞の發音を誤るなど、缺點を數ひ上げれば限りがない。いくら原著者がジャーナリストであるからと言つて、かうまで日本流のジャーナリズムに惡用されては、アレンは決して喜ばないであらう。譯書の「あとがき」によれば、福田氏は、三十年代を取り扱つた Only Yesterday の讀篇、Since Yesterday をいづれ譯出するさうであるが、是非ともやつていただきたい。ただ、その際には、三十年代のアメリカを大體調べると共に、英語の初步を今一度復習した上で飜譯に取りかかつて下さることを、日本の讀者の一人として心からお願ひする次第である。